

Title	思い出すまま
Author(s)	澤, 美枝
Citation	懐徳. 1985, 54, p. 116-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90652
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

思い出すまま

澤 美 枝

それはもう遠い昔。半世紀にもなる以前のことです。

部厚い緞帳の彼方に懐徳という心の糧があったのです。

「君子は徳を懐ふ」里仁篇のこの語句は父から私にしっかり植えつけられていたのでしょうか。そこにはいつも父がいたのです。「懐徳堂は大阪の民衆の大学です」松山先生のこの言葉に、大阪人としての誇りをもっていた私でした。父は私よりもはるかに篤学で、誠に立派なすばらしい父でした。大阪商家の大店の主人おきなであった父は、忙しい中にもよく堂へ通い、学んでいたようでした。その堂舎は大阪の旧町奉行所跡といわれた一角に巍然として建っていました。夏が来るとその東横堀川に蝙蝠がとび交い、冬は「かき舟」が繋がれていました。日が落ち舟にあかりが入り、紙障子をとおして灯が川面に揺らんでいたのです。川端すじに大きな柳が一株あって、二股

のそれは洵に美事な木であったのを覚えていています。

表に石垣があり、正面に立派な黒い木の門の構え、内に向って右側に大きな表札が堂々と掲げられています。その建物を入れてすぐ廊下、左右両側に小講堂、続いてその奥が講堂であったと思います。小学校と同じ様な木の机と椅子、冬には珍らしく、ストーヴも焚かれました。玄関に吊り下げられた木柝たけ、それは開講の時を報らせるものでした。撃柝たけの音が木の床に響き堂に届いたものです。後年の一時期、当時お豆腐屋さんが用いた「鈴かね」を鳴らした事もあったようです。当時の聴講生は前列より先輩・高年齢の方より順次席につき、若い私はいつも後の方に小さく坐っていました。これは先頃まで講座の聴講生はこの様な形で席を取るといふ不文律があったようです。今のように拍手もなく、誠に静肅な講義

でした。

昭和三年頃、月曜の定日講義、財津先生が「左伝」を講じられました。なかなか難かしく理解出来ず苦しんだものです。

土曜日「神皇正統記」をノートしました或る日「若いのに判りますか」と内藤湖南先生に声をかけられ「父に睨いて来ていますから」と小さく答えた事をよく覚えています。

昭和十年頃からの講座は、それはそれはすばらしいものばかり、いろいろ欲ばって少しづつ受講した事でした。論語は勿論吉田鋭雄先生、まことに詳しく一字一句丁寧に教えて下さり聖賢の道を説かれました。源豊宗先生は「藤原時代の仏画」つづいて仏像と、「絵巻の研究」をも併せ講じられ、日本美術史の解釈をつぶさに教えて頂き、後年仏像を拝観する眼を持たせて頂いたようです。

中村直勝先生の「神武天皇御創業当時の謹話」という題では現在では触れることの少ないこの時代の話を、又昭和十一年頃からは古文書を一年余り二十回にも及ぶ講座がありました。六月の雨の激しい日が最終講義で、初めての試みとして受講者が感想文を提出したのでした。

思い出すまま

万葉集の權威、沢瀉久孝先生は「大伴家持とその作品」、万葉集の精神と重厚な講義を伺い、伊勢の神宮文庫へもお連れ下さった事は有り難い事でした。先生はいつも羽織袴の端然としたお姿でした。阪倉篤太郎先生には、枕草子の特別講義、引きつづいて定日講義に万葉集がありました。昭和十三年九月より十年余り、まことに楽しい講義でした。私は何かと用事もありよく休み、さみだれ式の受講でしたが、父は休む事なく熱心に通ったのです。その受講ノートは数十冊にもなったようです。

後年父と共に北白川のお邸へお礼に伺ったとき客間の欄間に伎楽面などがならんでいた事が印象的でした。岡山先生は中国服を召していられました。漢詩の作法も教えて頂き添削を仰ぎました。辞書で用字の四声をしらべ、平仄を考え、平起仄起と考えつつ趣おもむきをのべるように努力しました。父はいつも秀作を提出、朱丸をもらっては賞められていたようです。

大東亜戦争が始まってからも講義は続けられました。防空頭巾を持って父と一緒に受講に出かけました。警戒警報が出され、サイレンが鳴って空襲警報、ようやく辿りついて見ると休講と知らされがっかり、灯火管制の暗い道を一散に馳けて帰った事も屢々でした。

一一七

思い出すまま

この様に私の青春時代の一時期、懐徳堂とのめぐり逢いは地味ではありましたが人間完成に少しづつ役立ったようです。父の遺していった沢山の受講ノート、達筆で美しく、克明に整理して書き綴られたノート、現在私の手許には十数冊となりました。昭和二十年一月二十五日万葉集第二百二十三講で途切れています。久しく取り出す事もなく何年かが過ぎました。いま改めて展いて父の学んだ跡をしのびたいと思う事切です。父が聴講生精励賞として頂いた辞書（広辞林）は今私の本棚に並んでいます。父と私が懐徳堂と共に育った事に限りない感謝の心を持ち、省みて大きな幸であった事をしみじみと思うのです。

一代を大阪船場の^{おおだな}大店の

主と崇^{たか}く生ききたる父は

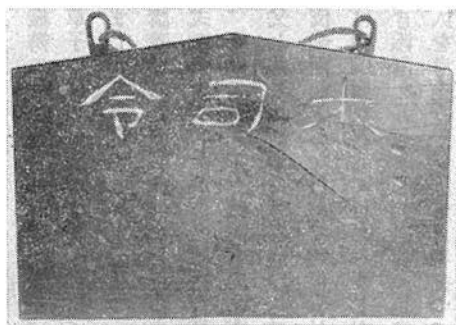
書を能くし文筆に親しみし晩年の
父よこのごろしきりにこひし

うしろ姿正しくあれとつね言ひし
父のころをひたまもり来つ

一一八

深層にたまはりし父母の思愛を

胸張りてうたふためらふことなく



木司令（大阪大学蔵）

「未完」